

最近、メディアでマンホールの蓋を取り上げる事例が多いように思う。私のような長年の蓋ファンからすると、ご糞屑のマイナースポーツが注目され始めたような感慨を覚える。

メディア露出への反応も良いようだから、マンホールの蓋に関心を持つ人がそれだけたくさんいるということなのだろう。

マンホールという単語を含むツイートは、今や数えきれない程だし、インスタ映えの被写体としても、当たり前のように登場する。

いつの間にか、蓋に興味を持つ人をマンホーラー、蓋好きの女子をフタジョと呼んだりするようにもなっている。

改めて蓋の魅力は何かと考えると、ワクワクドキドキが結構あることに気がつく。

真っ先に思い浮かぶのがデザインマンホールで、ご当地の名物、名所などが組み合わせられて描かれていることが多く、絵柄も面白いのでつい見入ってしまう。しかも今や日本全国どこに行っても自治体ごとに違うデザインの蓋があるのだ。

違うだけでなく、凝り方も半端ではない。複数のモチーフを一つの絵柄に見えるように処理するなんてお手の物。

丸の中に模様、という構成は、瓦や家紋として日本に古来から豊富に存在していて、マンホールの蓋のデザインも手抜きはヨシとしない方針になってしまうのではないか？というのは大げさかもしれないけれど、コツコツと魅力的なデザインマンホールが進化増殖していき、お、路上には魅力的な絵柄がいっぱいある！ということに気がついてきた人が増えてきたのが近年の現象かもしれない。

特に蓋ファンという人でなくても、何となく目に入るらしく、そういや、大阪城の近くでお城の絵柄が入った蓋を見たなあ、なんて話もよく聞くから、それなりの存在感を放っているのであろう。

特に、カラフルに彩色されたカラーマンホールだと、気が付かずに通り過ぎる方が難しい。

さて、蓋を探しに街に出てみよう。お目当があるのもいいけれど、あえて何も調べずに行く方が、どんなのがあるか！という玉手箱感があって、見つけた時の感激度が高かったりする。マンホール蓋の柄からそのご当地自慢を知ること出来るから、ガイドの役目も兼ねているのだ。旅先でお土産に何を買おうか迷ったら、デザインマンホールを眺めるのもいいかもしれない。

各地の蓋の柄までは調べられても、位置や範囲の詳細マップまで用意してくれている訳ではないから、探す、という行為も必要になる。これが嫌、という人もいるかもしれないが、探して見つけた時の感動というのも結構あって、蓋探しには出会いの楽しさもあるのだ。中々見つからない、なんてことも多々あって、極端な場合はノーヒント。運試しだと思えばこれはこれで面白いのだ

けれど。

もちろんとうとう見つからない、なんてこともあり得る訳で、人生とはそんなものよ、なんて、蓋探しが悟りの境地に。

デザインマンホールが華やかな花だとすると、ごく普通の地味な蓋は雑草扱いだけれども、これにもちゃんと楽しみ方がある。

全国でよく見かける模様は東京発祥で、今や JIS 規格に。名古屋市タイプと呼ばれている蓋もあり、それ以外にもバリエーションは意外と多い。これらには、その自治体の紋章が中心に入るのが通例で、紋章だけでも、日本全国を対象にすると、膨大な数になる。

ごく稀に他地域のマークの蓋があったりして、実はよくあることなのだが、越境蓋などと呼称して、蓋探しのジャンルのひとつになっている。

具体例を挙げると、広島市内に呉市のマークが入った蓋があったり。

市町村合併で消滅した自治体の名前やマークの入った蓋というのも探すが見つかることがある。合併しても、蓋は即取り替えではなく寿命が来るまで頑張るからだが、町が市になり、名前が代わり、マークが代わり、なんてことが路上の蓋には刻まれているのだ。

更にマニアックな楽しみ方を紹介しよう。

ごく稀に、戦前の蓋が生き残っていたりする。大抵はすり減ったり傷んだりして見るからに古そうで、一別して年代モノと分かる。日本の下水道の歴史、100 年を優に超えるけれど、実はほとんどの自治体での整備は戦後昭和 30 年代くらいからで、戦前の蓋が見つかる街、というのは数えるほどしかない。

広島市には戦前の蓋が 16 枚ほど現役で、街の歴史を考えると奇跡的に残っている、といえなくもない。こういうジャンルを骨董蓋などと言う人もいて、かくいう自分もこれらを探すために広島市中心部のすべての蓋を見て回ったことがあり、だからこそ判明した数字でもある。骨董蓋探し出来る街に住む幸せ、なんて視点で街を語る人はあまりいないだろうけれど。

古そうで、訳の分からない模様やマークの入った蓋、というのもあり、謎蓋と称して、由来は何ぞや？と調べたり。解決できれば名探偵だが、実は何も分からないことの方が多かったです。

さて、気に入ったマンホール蓋のそばまで来て、見ただけで立ち去るなんて人はあまりいないはずで、カメラでパシャ、このご時世だから、すぐにではないにせよ、SNS に投稿なんてパターンも多いのではないだろうか。

それを見て蓋のことを気にし始める人が増えることもあるだろうから、路上の蓋も魅力的なのに加えて、ネットで蓋情報に触れる機会が多いのも蓋ファンが加速度的に増えている一因かもしれない。

以前、観光地で蓋の写真を撮っている外国人ご夫婦のスマホを見せてもらったら、日本各地のデザインマンホールの画像が何枚もあって、外国人観光客にも日本の蓋が注目され始めているとい

う噂は本当かもしれない、と思った。

日本の蓋は恐ろしく小刻みな範囲でデザインが違って種類が多いけれども、こういうのは世界的に見れば稀らしく、しかもカラーマンホールがあちこちにあるなんてことも考えられないことだから、異国の地の蓋という理由以上に驚きの対象に見られているようで、今後、日本のマンホールの蓋を目当てに外国人観光客が押し寄せるなんてことが起きないとも限らない(多少は妄想だけど)

因みにマンホールというのは英語で、日本語に訳すと人孔と書き、人の入る穴、の意味だが、フランスでは、ホギャデヴゥ(と、聴こえる。違っていたらご指摘を)と発音していて、ロシア人にも発音してもらったことがあるのだが、何度聴いても聞きとれず。先日中国語でも聴いたのだがこれまたうまくカタカナに出来ない。とにかくマンホールの呼び名が世界どこでも通用するわけではないようだ。

最も、地球上人が住む所、特に人口密集地ならかなりの確率でマンホールの蓋があるはずで、世界中どこでも楽しめる趣味だと言える。

流行りのマンホールカードにも触れておくと、個性的な蓋が各地にあることを上手に活かした手法で、現地に行かないと手に入らず、見るだけのものに集める要素を付加し、カードとしての質も高いのだから、集める人が続出しているのも納得である。

長くなったがまとめてみると、マンホールの蓋は、どこにでもある。

種類が多く、自治体ごとに異なる。

デザインマンホールなど、観賞の対象になるような模様の蓋が増えている。

どこにどんな模様の蓋があるか行かないと分からない。

その街の歴史が分かる。越境蓋、骨董蓋の見方も出来る。

探す楽しみがある。

現地に出かけるだけでも楽しいし、近頃は、一枚だけ設置で場所は秘密！なんて事例もあるし、キャラクター物、期間限定物まで登場している。

カード、グッズなどが増えていて、集める楽しみがある。

他にも理由はあるのかもしれないけれど、マンホールの蓋が魅力的な理由はこんなところだろうか。

デザインマンホールはこれからも新種が登場するだろうし、とにかく膨大な枚数がこの世に存在しているから、まだ誰も見つけていないような蓋を探す余地も残っている。

街中のパーツで、どこの街にでもあって街ごとに種類の違うものは他にもあるけれども、これだけの楽しみを提供してくれるパーツはマンホールの蓋以外にちょっと思いつかない。